

日本伝統工芸展開催中の9月18日(日)、「日本工芸週間」(主催・ザ・クリエイション・オブ・シヤパン)がスタートした。工芸の魅力と力を未来に向けて高めていくための情報やアイデアを、世界の工芸ファンと共有しようという初の試みだ。

「担い手不足」、「材料や道具の制作者の激減」などの構造的問題ゆえに先行きが不安視される工芸だが、初日のオープニングにはそれを許すまじとの情熱にあふれた多様な人材が集まった。全国から10組の工芸家・アーティスト、海外や京都から3人の外国人、そして伝統工芸の人間国宝などの錚々たる方々が

新美術
時評

近藤誠一

感が重要なのだ。自分の地域の

素材を選び、将来の使い手に想いを馳せながらひとつひとつ形やデザインを考え、色を施し、素材に合った道具で丁寧に制作し、釉薬を塗ってあとは天に任せる。作家が自然と対話なが

自然と一体になり、地域にアイデンティティを感じ、作家と使い手のところが通じ合う体験は必ずや親から子へと受け継がれ、そのための時間や費用を惜しまなくなる。毎日スマホに費やす時間の三分の一でも工芸に使えば、幼児期の非認知的能力の開発が、その子の人格形成、ひいては社会の円滑な運営に役に立つという最近の研究が正しいことを感じるであろう。

この魅力は工芸に限らない。能のような舞台芸術、和音楽、美術、短歌や俳句のような文学などのあらゆるジャンルに共通する日本文化の精髓だ。従って異なる分野の共演は、相互に学

秋のお彼岸の楽しみ方

会場やオンラインで登壇し、それぞれで想いと自身の取り組みを説明した。

最後のセッションで参加者は工芸の魅力の拡大のためのアイデア提出を求められた。日本工芸週間に工芸品を買うと割引になるとか、作品の自然に対する優しさに応じてポイント(エコポイント)がつく制度の導入などの案も出た。いまの社会を動かすにはこうした経済的インセンティブが必要なのかもしれない。

しかしそれは本道から外れるような気もした。工芸の魅力の本質は経済性ではない。日常的に自分の手で触れて感じる幸福

ら徐々に形にしていくこうしたプロセスを一度でも経験することで、工芸の価値や奥深さ、そこから学び得るものの素晴らしさを肌身で感じる事ができる。使い手もその過程に想いを馳せ、世界でたったひとつの作品を大切に使う。機能とコスト、工業デザインだけで量産される工業製品にはない価値だ。

そうした観点から、皆が誘い合って工芸作品をつくり、傷んだものを修復し、それを初日に持ち寄って自分の地域と技を自慢し合うというのはどうかと提案した。上手か下手かは問題ではない。初日はみな着物を着て集まるというのがいい。

べるとともに、見る側にとっても魅力も倍増する。それを目的として今年も日本伝統工芸展に合わせて「現代の匠たち・藝能与工芸の饗宴」を開催した(於GINZA6 観世能楽堂)。

来年以降も秋のお彼岸を挟む日曜から日曜までが日本工芸週間となる。そこに思い思いに作り、修復した工芸品をもったひとびとが着物姿で集い、自慢し合い、そして土曜日には「藝能与工芸の饗宴」を楽しむ姿が見られる時が必ず来ると信じてい。

(日本文化に特化した最新情報ポータルサイト:「和綴」<https://watoji.jp/>)

(近藤文化・外交研究所代表)